



バリアフリー
准教授 福島 智

Barrier Free
Associate Professor FUKUSHIMA, Satoshi

盲ろう者になって 26 年 自らを分析し、学際分野に貢献

インタビュー：教授 伊福部 達

9歳で視覚、18歳で聴覚を失う

—— 福島先生は、『盲ろう者とノーマライゼーション』『渡辺荘の宇宙人—指字で交信する日々』といった著書があったり、ドラマや漫画の主人公になったりと多方面に活躍されていますが、今般、学位論文としてその集大成をまとめられるそうですね。

私は9歳で見えなくなり、18歳で聞こえなくなって、盲ろう者になったわけです。そこが私の半生の重要な原点という出発点になっていて、それから26年。今44歳の私は盲ろう者として生きた時間の方が長くなっています。

博士論文のテーマを設定するにあたって、各方面に興味があって迷ったのですが最終的に原点に戻ったらどうかということになりました。つまり、自分が見えなくなって聞こえなくなったことがどういう意味を持っているのか対象化して、分析することがおそらく教育学、社会学、心理学、コミュニケーション論、あるいは障害学などに一定の貢献をするだろう、何よりもこれは自分にしか書けないだろうから、自分が生きている間にまとめたほうがいいかなと思ったんです。これは学問的には社会学の一種、すなわちエスノグラフィーを自分に対して行う、「オートエスノグラフィー」になるらしいのですが、自分のことを描写するのはとても難しく、悪戦苦闘しています。

—— 盲聾だったヘレン・ケラーは自伝で自己表現をして伝記を残していますね。福島先生との違いは？

客観的な事実として、彼女は生後19ヶ月で目と耳の能力を両方失って、とてもプリミティブな状態で幼児時代を過ごします。その後、サリバン先生の導きでヘレンは言葉と出会うわけですね。ところが私の場合は最初は見えて聞こえていた。そこからまず右目が、次に左目が見えなくなって、さらに右耳そして左耳が聞こえなくなるというように順番に機能が落ちていきました。ヘレンは右肩上がりの直線ですが、私の場合は落ちてから上がるV字曲線を描く人生です。

その間、私は3つの世界を渡り歩いたと思っています。小学校3年生までは見えて聞こえる普通の人の世界、高校2年生までは見えなくても聞こえる世界、そして今は見えなくて聞こえない、という3つめの世界を体験しつつあります。それぞれの世界における感覚はよく覚えていますので、とても不思議で人生を3回やっている感じがあります。

言葉そのものが持つ力と、 言葉を超えて伝わる文脈と

—— 論文でも3つの世界を描きながら自分を主観的に見たり、客観的に見たり、色々な観点から自分の全体像を表現しようとしていますよね。

盲聾者になった18歳、指字という方法が見つかった周りの人に情報提供してもらって復活していく約半年の重要な時期を「智」、その後の自分を振り返っているのが「福島」、それを執筆しているのが「筆者」であり「私」というように分けようと、考えています。

以前、テレビのニュース番組を1分間録画して、その中に含まれている画像データ、音声データ、文字データをとりだして、バイト数を簡単に計算したら、画像データが文字データの5万倍、音声データは2千倍だったんです。2千倍と5万倍だから音と光の両方があるデータと音だけのデータの差は25倍。だけど、音だけと文字だけは2千倍のバイト数の違いがあるから25倍と2千倍でその間には80倍の比率があって、見えなくなったときに経験した情報の減少より、見えなくて聞こえなくなってからの方が、劇的に少なくなったという自分の体験的実感ともマッチしたんですね。ところがその一方で思ったのは、バイト数では決定的に情報量が少なくなったのに、それなりに生活や仕事が出来ている。これは一体、どういうことなのか。

そこには2つの大事なファクターがあります。ひとつは、バイト数に還元できない言葉そのものの持つ力。もう一つは、コミュニケーションをサポートしてもらうことで、その言葉が生き物のように動いて豊か

な世界を私に提供してくれるということ。そのことが、私をこの世界につなぎとめているんだなぁと感じています。

——バイト数に還元できないプラスアルファがコミュニケーションにとって非常に大事だという、このプラスアルファとは具体的にどのようなものでしょうか。

言葉そのものの力というのは、先ほど伊福部先生が「今日は暑いよね」と仰って、それに対して「北海道ご出身だから大変でしょう」と申し上げたら、先生は「汗腺が半分くらいしかないんだと思う」と表現されました。「汗腺が半分くらいしかないと思う」、というのは文字にしてみればわずかなデータです。でもそれに含まれるなんとも言えない暑さ、しんどさ、体の底に染み付いた先生が生きてこられた生活空間と東京とは根本的に気候が違うんだ、ということがこの一言で表現されているわけです。ここには言葉が持つ潜在力みたいなものがあります。

もう一つは、生きたコミュニケーションを提供してくれている通訳者の存在です。そこには言葉を超えたいろんな文脈が伝わる、例えば先生は先ほど「バイト数で還元できないデータは何ですか」というところを、間違われて「言葉ではないところは何か」といわれてその後に訂正なさいましたが、これは暑さが先生にボディブローのように利いてらっしゃるんだ、という背景が伝わる(笑)。例えば、こういうことです。

——大変わかりやすい(笑)。実は東京で福島先生に最初にお会いしたとき、私に「半ズボンを着ていて涼しそうですね」って言ったんですね。その時はびっくりしてしまって、通訳者が提供するその場の環境情報もすぐ大事だと感じたんですが、そのあたりはどうですか。

すべての情報を伝えるのは絶対に無理で、それどころか現実の視覚的・聴覚的情報のごくわずかししか伝えられないので、私の通訳者は膨大な情報量の中から何を切り取るかという、俳句を即興で作るようなセンスが要求されるということですね。例えばラジオの野球中継で、アナウンサーが球場の膨大な情報の中から限られたものだけを選んで伝え、聞いている人がその場面を生きたまま想像することができる、あれと似たような行為を通訳者をお願いしています。もちろん完璧というものはないし、個人差もあるわけですから。5年前の7月に伊福部先生が半ズボンだったという情報は、先生の性格や人となりを一定程度イメージさせるし、何よりも東京をとて暑く感じておられるんだろうなということがよくわかる重要情報だったわけです(笑)。

——ジェスチャーや抑揚などノン・バーバル情報の役割はどのように考えていますか。

私もかつては聞こえていたし、その前には見えていたので、非言語的なジェスチャーといったものが多くの内容を伝えていることは理解できるんですが、今の私には自力でそれをキャッチできません。今は情報が少ないことを逆手にとって先入観を抱かないことを心がけています。また、私には第一印象というものがないので、ゼロから出発してコミュニケーションのやり取りの中から徐々に相手のイメージを肉付けしていくという方法をとっています。

通訳者もある程度、指の強弱やリズム、抑揚で伝えてくれます。私自身は、本を読むのと似た感覚で相手の発言に注意を向けていて、例えば助詞や接続詞の使い方、語尾が「ね」なのか「よ」なのか、そういったことで感じはつかんでいます。とは言っても、そこには限界がありますが。

見えない、聞こえない状況で、何を考え、どう感じるのか

——福島先生の思考の仕方についてうかがいます。ものを考えるとき、頭の中でもう一人の自分と対話するように考えると思うんですが、盲聾になった今でも変わりませんか。また、夢を見るのも頭の中でのことだと思うんですが、夢をどのように感じていますか。

考えるという行為をしているときの私の中の脳の活動がどうなっているのか。私自身も興味がありますね。視覚的なものはあまりイメージしません。音声や文字ですね、この場合は普通の文字ではなくて点字です。九つから使っている点字が私にとっての文字なので、それが頭の中で流れたり、音として言葉が流れたりするイメージです。映像ははっきりしないんですが、幾何学的な映像は浮かびます。座標軸や丸や三角形、線分や曲線だったり、引き出しのようなイメージでカテゴリー分けをしたり。そういう線だけの、味も素っ気も無いような映像はよく浮かびます。でも、絵の様なカラフルな映像はほとんど浮かばないですね。

夢も似ていますが、ちょっと違う所もあって、まず音のイメージがあって、同時に指点字、そして点字のイメージもあるんです。さらに複雑なことに、例えば今この部屋には私と通訳の方以外に伊福部先生と神野さんがおられる、という情報が与えられているので、姿は見えないけれどもそれぞれの存在の認識が私にはあるんです。これは視覚でも、聴覚でも、触覚でもない。なんともいえないんですが、存在していることだけはわかるという感覚。それが夢の中にもあって、見えてはいないし声が聞こえているわけではないけれど、その部屋に誰がいるということはわかる。例えば、小説を読んでいるときに「この部屋には二人の男がいた」という記述を読んだ人が、二人の男性がある部屋にいるんだなというのを思い浮かべるのに似ているかもしれませんね。

——こういうお話はコミュニケーションの本質のような気がします。我々にはむしろ、音声、文字、写真、画像などの具体情報がありすぎて、大事な感覚を失ってしまっているのかもしれない。先生のような非常に少数の人の経験を普遍化する作業が、福島先生に課せられた大きなテーマだと思うんですけども、あらためてどのような形をとるのでしょうか。

自分が筆者でありながら、描かれる客体でもあるので、主体と客体を概念的に分離しようとしても無理があるという制約や、対象が私というひとつのケースなので、それを普遍化するために、数の上での説得力を持たせることは出来ません。

ただしその上で、私において起こったいくつかの現象や内面で起こった変化は私以外の人やケース、いろいろな問題を解釈したりする上で参考になるかもしれない。それを私が死んだ後に伝記作家や歴史研究者のような人にやってもらうのではなくて、自分でやりたいと思ったということですね。見えなくて聞こえないという状況におかれた時に人が何を考えるのかを示すことは、感覚遮断実験を地で行っているということ(笑)。倫理的な問題もないし、私がせつかくそういう極限状態を体験するんだから、(自分で書かないと)もったいないな、という感覚がありますね。

バリアフリーを基軸に 学際研究・学際教育の実現を

——最後に、福島先生はご自身の経験を先端研あるいは世の中のためにどのように役立てたいとお考えですか。

私は、バリアフリーという概念は現在進行形で、「シンカ」していると思うんですね。これは進み化ける「進化」と、深まり化ける「深化」の両方の意味です。障害の体験は重要なファクターではあるんですが、おそらくそれだけではない。さまざまな物理的、心理的なバリアをわれわれは抱えているし、体験しているし、社会としても持っているもので、

そういったバリアを除去していくというキー概念を通して、文系の領域と理科系や工学系と呼ばれるさまざまな分野を融合するような、新しい学問分野をみんなで作っていけないかという気持ちがあるんですね。

文系的なアプローチ内部でも、理科系のアプローチ内部にもそれぞれいろんな方法がある。その二つが融合すると立体的な融合になるはずで。例えばバリアならバリアをそれぞれの専門分野の人たちがどのように定義し、同定して、その除去をどのように目指すのかを持ち寄って研究していく中で、それらが溶け合ってこれまで見落としていたり、気づかなかった新しい方法や新しい視点が生まれるかもしれない。少なくとも教育にそういった視点を盛り込むことで、これまでは無かったものの考え方を有する人材が養成できるかもしれないという気持ちがあるんですね。ばらばらになってしまっている学問領域の中に、部分的でもいいですから本当に溶け合えるような、融合できるような学際研究というようなものを実現できないか。学際教育はできないか。バリアやバリアフリーというキーワードで学際分野を串刺しに出来ないかという感じを持っています。それがこの大学における私の夢ですね。

今日はバリアフリーという串でさまざまな素材を刺しておでんを作る、食べるというようなお話で締めたいと思います。

—— そうですね、その辺をオチにして。おでんは暑いからそうめんの方がいいかな。ご活躍をお祈りしています。

そうめんには串はさせませんが、何か考えれば新しい刺し方があるかもしれません。先生も暑いのは大変だとは存じますけれども、私の夢にぜひ、ご協力ください。

(2007年8月15日)

略歴

1992年3月

東京都立大学大学院博士課程人文科学研究科教育学専攻単位取得満期退学

1992年4月

東京都立大学人文科学研究科特別研究員(日本学術振興会, PD)

1996年7月

東京都立大学人文学部助手(教育学研究室)

1996年12月

金沢大学教育学部助教授(障害児教育講座所属)

2001年4月

東京大学先端科学技術研究センター助教授

2007年4月

東京大学先端科学技術研究センター准教授

関連情報

福島 智 助教授のページ

<http://www.bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp/fukusima/>

福島研究室 / バリアフリープロジェクトのサイト

<http://www.bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

東京大学先端科学技術センター

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/>